

きずな

2026
春・夏号
No.32

[特集]

市街地の中に奇跡的に残る
里山の自然を舞台に
自然を愛し、里山の活動を
心から楽しむ人々が集う

柏市 NPO法人 下田の杜里山フォーラム、下田の杜の自然を守る会

[散歩道] 歴史あるお寺を巡る散歩道

540年以上の歴史のある名刹を出発し
松戸の歴史や自然を楽しみながら歩く

市街地の中に奇跡的に残る里山の自然を舞台に 自然を愛し、里山の活動を心から楽しむ人々が集う

柏市
NPO法人 下田の杜里山フォーラム
下田の杜の自然を守る会



柏市の市街地の真ん中に奇跡的に保存されている5.4ヘクタールの里山。地権者の「この自然を後世に」という強い意志から始まった活動は里山を愛する多くの住民が活動しています。

市街地に残る貴重な 自然の楽園

常磐線南柏駅を降り、バスで約10分。竜光寺前バス停で下車し、住宅地の中を進んでいくと、まさに忽然といった感じで目の前に大きな里山の風景が現れます。広さ5.4ヘクタール。周りを低い森に囲まれ、なだらかな下り坂が中心に向かって続く、すり鉢状の地形になっています。森の斜面に囲まれているため、目に見える樹木や緑が一層濃く感じられ、その中にぽっかりと広がる畑や広場、果樹園や古民家からなる里山の風景が日差しに照らされて暖かく浮かび上がっています。この森からいく筋もの湧水が清水となって流れ込み、小さな池を作っているのが見えます。今回ご登場いただくのは、この街中に残された貴重な自然「下田の杜」を舞台に活躍される2つの団体「NPO法人 下田の杜里山フォーラム」と「下田の杜の自然を守る会」の皆さんです。特に1年を通してこの里山の保全活動を担っているのが「NPO法人 下田の杜里山フォーラム」の皆さん。1975年、地権者の齋藤吉弘さんの呼びかけに応えて集まったのが、活動の元となった「下田

の杜の自然を守る会」の皆さんでした。現在は両団体合わせて約70名の会員が、豊かな湧水群と多様な動植物、地域の文化遺産を守るべく活動を続けています。

里山の名称となっている「下田」とは、この地で300年余り地域の歴史とともに歩んできた旧家、齋藤家の屋号です。この2つの団体の活動は、齋藤さんの「貴重な自然を守り、いつまでも親しんでいただきたい」という気持ちから始まりました。「もともと齋藤家では、いまの5倍以上の土地を所有していました。しかし世代交代で、相続するたびに土地は減り、そこには多くの住宅が建てられてきました。もちろん家が建てられ人が増えることは街の発展にとって大切なことですが、一方で貴重な自然がどんどん失われていくことに大きな危機感を持っていました」と齋藤さん。



齋藤吉弘さん



「この土地は個人が所有していたと言っても、昔から地域の方々に常に解放され、憩いの場所として人が出入りしていました。それが失われていくことへの悲しさも活動を始める一つのきっかけになっていたと思います」。

この齋藤さんの自然を守りたいという強い意志、そしてそれに賛同する多くの市民の方々の声が行政を動かし、現在では柏市において「下田の杜憲章」が制定されました。都市緑地(市有地と私有地)と特別緑地保全地区(すべて私有地)と地権者の居住地区からなる下田の杜として、地権者と行政、そして市民が協働してこの貴重な自然を守る運動が展開されており、環境省の「自然共生サイト」初回認定地となりました。

里山を維持するための地道な活動

齋藤さんの意志から始まった貴重な自然を守る活動は、こうして徐々に広がりを見せ、ようやく現在の形へと成長してきました。齋藤さんは現在の活動について次のように語ります。



北田芳則さん

「下田の杜を残していくためには、単に土地を残すというだけでなく、きちんと管理していく必要があります。放置すればすぐに荒れてしまいますし、さまざまな問題も発生します。例えば住宅が密集してくると『木の影ができる』『落ち葉が飛んでくる』といった近隣住民からの苦情に対応しなければなりませんし、落葉が火災の原因(タバコのポイ捨てなど)にならないように配慮する必要があります」。

そのため、冬場には2カ月近くかけてトラック何十台分の落ち葉を運び出すといった、人海戦術による大変な作業も欠かせません。このような継続的な作業は月3回のボランティア活動によって支えられています。

取材当日の日曜日、お集りになった方々は約20名。皆さん朝の挨拶を済ませると三々五々「勝手知ったる我が庭」のご様子で、雑草を刈り取

で盛り上がります。「下田の杜周辺には小学校3校があり、下田の杜の豊かな自然を使った自然観察や農耕体験などの環境教育・教育支援も行っています」と北田さんは語ります。

例えば、稲作体験や小学4年生による「マイツリー観察」などでは、春夏秋冬を通して自分が選んだ樹の葉っぱや樹皮などが季節によってどのように変化するかを観察します。

また、未来の教育人材育成として理科教員志望学生のための里山講座や、近年では環境問題をグローバルな視点でとらえる国際的な人材の教育交流にも取り組んでおり、東南アジア(タイ、台湾、フィリピン、マレーシア)の大学生等に自然と共生する価値観を共有。意識を高めるプログラムづくりに努めています。

下田の杜は地域の残された最後の楽園

会の活動の記録や、下田の杜の自然や生きものを写真で記録し続けるメンバーの田中二三さんは、下田の杜の貴重な自然の価値を知るお一人です。

「この場所は、生きものにとって地



田中二三さん

域に残された最後の楽園のような場所です、本当にたくさんの種類の生きものとお出会うことができます。最初は鳥の写真から始めたのですが、次に昆虫にも興味が湧いて、今では1年に200日くらいこの場所に通っています。長年にわたり鳥や昆虫を撮影し続けた結果、下田の杜の自然がどれほど貴重なものであるかを改めて感じられているようです。「例えば野鳥は現在全国で約600種いると言われていますが、ここには70種が生息しており、そのうち18種は絶滅危惧種と言われる希少な鳥です。同じようにチョウは全国で約250種のうち49種(うち8種が絶滅危惧種)、トンボも全国で約200種のうち29種(うち12種が絶滅危惧種)がここで暮らしています。もうこの数字だけで下田の杜の自然がどれだけ貴重なものであるかがお分かりいただけると思います」。

最近の興味の対象はカメムシ、ハチと細分化され、さらに花へも興味は広がり、もはや下田の杜での撮影はライフワークとなっています。話をされる田中さんの幸せそうなその表情からは、ここでの活動の充実感がにじみ出ています。

田中さんは小学生の皆さんが参加する観察教室などで虫について教えることも多いため、街中で子どもたちから「虫おじさん」と声をかけられることがあると言います。

「メンバーの方々や住民の皆さんのご理解やご協力があつてようやく今のような活動の形が出来上がりましたが、大切なのは今後もこの活動を継続し、長くこの下田の杜を守っていくことだと思います。どのように活動や精神を後の世代に引き継いでいくか、これがこれからの大きな課題です」と齋藤さんのお言葉でした。



る方、古民家の修繕を行う方、伐採した枝を片付ける方、みかんを収穫する方、里山内の見回りをする方などに自然に別れ作業が進みます。そして休憩時間には、暖かい日が差す庭にテーブルが出され、収穫したみかんや持ち寄ったお菓子などを楽しむ「お茶タイム」。皆さん自然に集まって会話を楽しまれています。

1年を通し、常にイベントを開催中

こうした地道な活動によって自然環境と文化資源の保全がされています。

「その成果を地域社会の学びや交流の場として活用する活動もしています」と語るのは下田の杜里山フォーラム理事長の北田芳則さん。その一つに毎年秋に開催される「里山フェスタ」があります。

里の恵みを活用したクラフトや綿繰り、野菜の収穫などが楽しめる「体験コーナー」や下田の杜の自然や活動を紹介する「展示コーナー」、花炭・綿細工・稲わらリース、生きものの図鑑5種などの「販売コーナー」等の自然の豊かな恵みを感じながら楽しく参加できる地域のお祭り



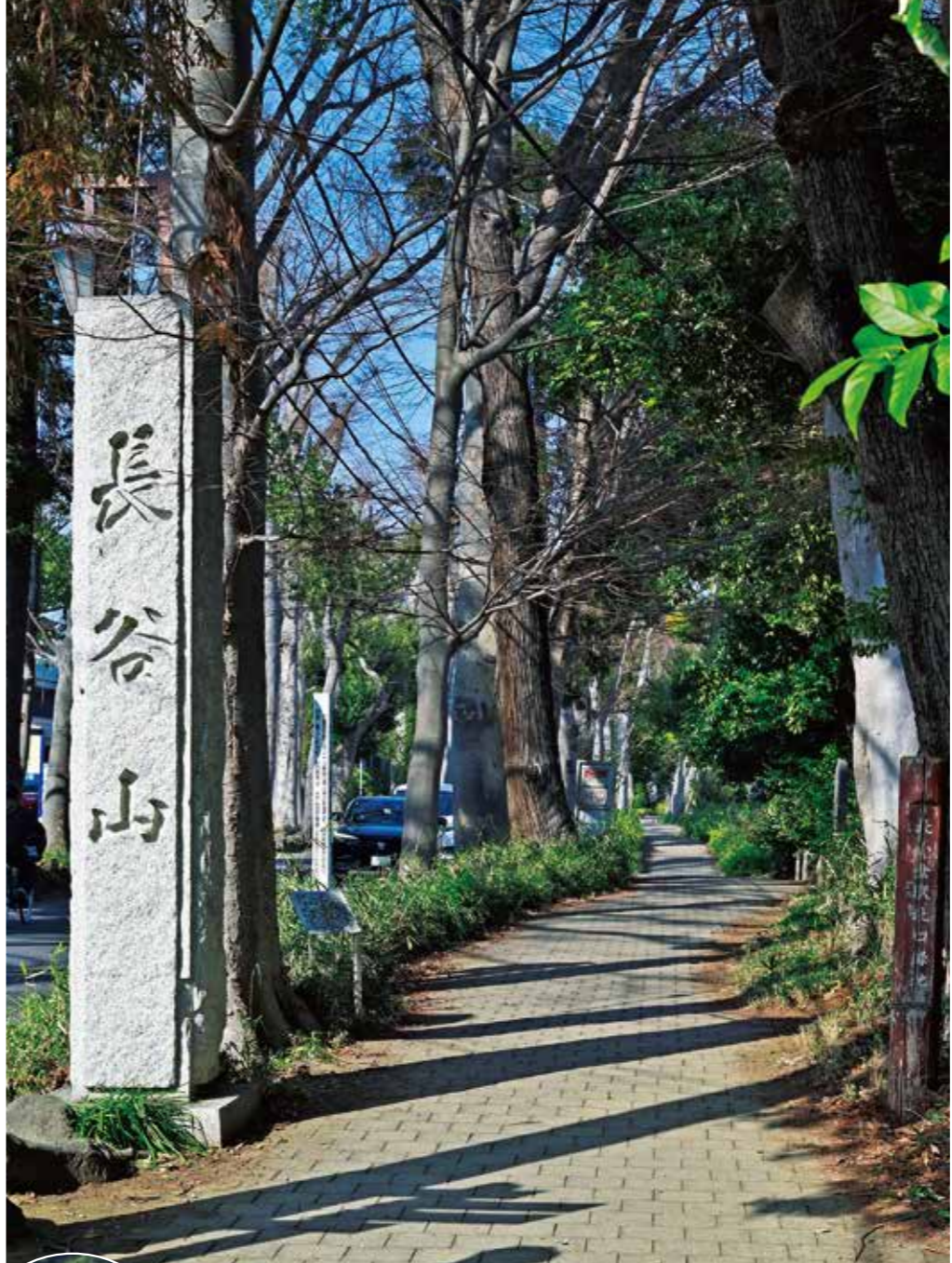
散歩道

松戸市 北小金駅周辺

歴史あるお寺を巡る散歩道

540年以上の歴史のある名刹を出発し 松戸の歴史や自然を感じながら歩く

北小金駅周辺には、美しく、そして長い歴史を持つ2つの名刹があります。今回の散歩は、松戸市の落ち着いた街並みや素晴らしい見晴らしの公園を楽しむながら、たくさんの方々が訪れる名所ともなっているお寺を巡ります。



長谷山本土寺へと続く参道。木々の間を通り抜けるように歩道が造られています。



散歩の出発点、仏法山東漸寺の総門

2つの名刹をめぐる 小さな旅

今回の散歩は、松戸市にある2つの名刹をめぐる小さな旅。常磐線北小金駅から徒歩7分ほどにある仏法山東漸寺を出発し、少し遠回りを楽しみながら駅の反対側にある長谷山本土寺を目指す約1.5時間のコースです。

出発点の仏法山東漸寺は540年以上前、1481年に開創した浄土宗の関東十八檀林の一つとされた名刹で樹齢300年以上を誇るしだれ桜があることでも有名です。

樹木が優しく影を作り、季節によつて梅やあじさい、もみじなどが見られる、長くまっすぐな石畳の参道は散歩の出発点としてこれ以上ない素晴らしい場所です。

お寺の前を通る小金宿通りを渡り、京葉銀行北小金支店を目印に住宅地が立ち並ぶ静かな道に入つて歩いていくと、右側に小金公園が見えてきます。道から見下ろすように広がる起伏のある公園で、道からは公園で遊ぶ子どもたちやベンチで寛ぐ方たちの姿が見えます。

公園を通り過ぎると、旧水戸街道に突き当たります。道なりに右方面へ進むと、今度は国道6号と交差した大きな交差点に至ります。交差点を渡った左側には樹木が生い茂る小高い山が見えます。根本内歴史公園です。戦国武将高城胤忠たねたけによって築かれたとされる根本内城があった場所で、現在は公園として整備されています。入り口から続く短い坂を上り公園内に入



仏法山東漸寺
540年以上の歴史を持つ浄土宗のお寺。多くの木々に囲まれたまっすぐな長い参道はとても見事です。



根本内歴史公園
根本内城があった場所が歴史公園として整備されていて、曲輪や土塁、空堀が保存されています。



上富士川氾濫原
豊かな自然環境が残っている湿地帯です。自然観察会やヨシ刈り等の活動が行われています。



東雷神社
常磐線の線路にかかる歩道橋のすぐ手前に鎮座しています。創建は室町時代後期と伝えられています。



長谷山本土寺
「あじさい寺」として親しまれている日蓮宗のお寺。花菖蒲をはじめ、四季折々の花樹を見ることができます。

ると、曲輪の跡や土塁、空堀が保存されている様子を見ることができ

ます。広場の一角、樹木の生い茂る中を下る小道を進んでいくと、目の前が急に開け、川に沿って広々とした草

地が広がっています。上富士川氾濫原と呼ばれる湿地帯です。貴重な生き物の生息地にもなっています。湿地の中の小道を進み、散歩は続

きます。国道6号の下を通り抜け、住宅地の中を進んでいくと、目の前に常磐線の線路が現れ、手前に小さな東雷神社が佇んでいます。鳥居の横にある常磐線にかかる歩道橋を渡り、北口側へ向かいます。

当たります。周囲には高い建物も少なく田畑も目立ち、とてもどかです。落ち着いた場所です。ここでちょっと一休み、というのも良いかもしれません。東平賀公園からさらにまっすぐ歩を進めていくと、すぐに大きな樹木に囲まれ、道の両脇に歩道が設けられた道に出ます。長谷山本土寺に向かう参道です。樹木が緑陰を作り、歩道は木々の間を通り抜けるように左右に揺れながら続きます。自然と歩調も緩やかになり、周りの景色が目が行くようになります。

今回の終着点、本土寺は別名「あじさい寺」「四季花の寺」として高い名刹です。多くの方がその境内の美しさを目当てに訪れる場所でもあります。また本土寺は花菖蒲の名所としても知られています。6月上旬には5千本の花菖蒲が可憐な花を咲かせます。境内にはこうした美しい花々とともに歴史ある建造物が多数存在しており、見所も満載。境内で時間を過ごされるのも良いでしょう。季節ごとに異なる美しい風景を見ることができ、散歩を兼ねて何度も訪れたい場所です。



千葉の野に生きる 野花と野草

-16-



寒い季節がようやく終わり、暖かな季節が到来しました。日常の散歩コースにも、春の到来を告げるさまざまな草木や野花が現れてきます。

その中の1つか2つ、名前や姿を覚えておくと、自然を眺める小さな目的ができて、いつもと違った自然の細やかな風景も見えてきます。

■ニワゼキショウ

ニワゼキショウは、明治時代に観賞用として日本に渡来して以降、花が可愛らしいことから広く親しまれてきました。こぼれ種で増えるため繁殖力が強く、現在では日当たりの良い道端、公園、土手など、いたるところで見かけます。花の直径は約1.5cm。6枚に分かれ、花色は紫と白があり、園芸種には青色や



クリーム色などの花を咲かせるものもあります。花弁の中心部が濃紫色と黄色であることから「Blue eyed grass (青い目の草)」の英名があります。

5月〜6月に赤紫色や白の小さな花を咲かせる一日花ですが、次々と新しい花を咲かせます。名前の

由来は、庭に生える石菖せきしょう。葉の形がシヨウブ科の石菖によく似ているということにちなみます。

花言葉は「繁栄」「豊かな感情」「愛らしい姿」です。

学名は「*Sisyrinchium*」。

ギリシヤ語で豚の鼻を意味する言葉が語源となっています。これは、ニワゼキショウが牧草地などに生え、豚が根を掘り返してしまうことから付けられています。

■ミヤコグサ

ミヤコグサ(都草)は春から初夏にかけて黄色の可愛らしい花を咲かせるマメ科の多年草です。日本全国の海岸や山野などの日当たりの良い場所に自生しています。草丈が短く地面を這うように群生し、花は小さく1〜1.5cmほど。明るい黄色の花を一面に咲かせるため、黄色の絨毯のような素晴らしい光景となります。

花期が長く、春に咲き始めてから花数を減らしながら初夏まで咲き続けます。花が咲いた後は2cmほ

どのインゲン豆のような形状の果実を付けます。この果実は真っ黒に熟し、鞘さやが弾け、種子が飛び散る仕組みです。

ミヤコグサの名前は、昔の京都都(あるいは奈良の都)に多く自生していたことから付けられたという説があります。別名で烏帽子草えぼしぐさとも呼ばれ、これは花の形が烏帽子のような姿をしていることに由来します。

ミヤコグサの花言葉は、「また逢う日まで」「気まぐれな心」です。

花言葉の由来には「都を去る人が都を離れる寂しさを、ミヤコグサに重ねた」といった説もあります。

